

時代の眼

晩婚化・非婚化を考える

河野 稠 果

近年わが国で出生率低下が国民的課題となるに至った。このまま低出生率が続けば、やがて日本の人口は減少し始める。同時に出生率低下は将来の労働力人口を縮小させるので、高齢人口の負担は一層きびしくなるものと予想される。

近年の出生率低下は、結婚している生み盛りの夫婦が子どもを産まなくなったわけではなく、むしろ適齢期の男女が結婚しなくなったことによっている。合計特殊出生率は過去20年間に2.14から1.46に低下しているが、この減少分のうち、どれだけが年齢別夫婦出生率の低下によったのか、そしてどれだけが有配偶率（各年齢で現在結婚している女性の比率）の低下によったのかを要因分解してみると、その100%が有配偶率低下によっている。つまり近年の合計特殊出生率の低下はすべて、適齢期男女の晩婚化あるいは非婚化によることになる。ちなみに、女性で最も出生率の高い年齢25～29歳の有配偶率をみると、1970年は80.3%であったが、85年には67.7%、90年にはわずか57.5%に減少している。

さて、適齢期の男女がなぜ最近結婚しなくなったのであろうか。推測も加えて考えてみると、それは大体次の3つの理由によるものと思われる。第1は見合い制度の衰退、第2は男性と女性がそれぞれ相手に期待する条件の違いによる、結婚市場におけるミスマッチ現象、そして第3として独身女性が結婚や家庭に対して抱き始めた幻滅感であろう。しかし残念ながら現在の調査技術の段階では、そのうち何パーセントが第1、第2、第3の理由によるのかをはっきりとした数字で表せる状態に達していない。

第1の見合い結婚の衰退は戦後の不可逆的傾向である。しかし一方で見合い結婚を忌避しながらも、それでは適齢期の男女が恋愛関係を満喫しているかといえば、そうではない。1992年に厚生省人口問題研究所が行った「結婚と出産に関する全国調査」によれば、18～34歳の未婚男性のうち交際している女性が全くいない人は47.3%、未婚女性のうち交際している男性が全くいない人は38.9%と淋しい結果になっている。見合い結婚の衰退は、結婚を前提とした男女の交際機会を狭くして

いるように思える。

第2の適齢期の独身男女のミスマッチは、根本的には男性が女性に求める条件と女性が男性に求める条件が非常に異なることに由来している。ミシガン大学のバス (D. Buss) 教授の国際比較研究によれば、女性にとって重要なのは男性の経済力・甲斐性であるが、男性にとっては女性の若さと美貌が一番の条件であり、これは洋の東西を問わず普遍だという。厚生省人口問題研究所の前掲調査では、男女ともまず相手の人柄を重視するというが、それに続く重要な条件として、女性にとっては男性の経済力、男性にとっては女性の容姿を挙げている。

結婚適齢期の独身女性は独身男性に対して数が少ない上に、上方婚志向（たとえば“三高志向”）があれば、結婚市場で男女間のミスマッチが起こる。経済力のない男性、学歴のない男性、3 K 産業に従事する男性は望みが少ないことになる。一方、大学卒で収入の高い女性は国内では相手が見つからないことにもなる。テレビ等の普及で、都会風の瀟洒^{しょうしや}で物質的に充実したライフスタイルを維持できる“カッコ良い”男女が理想像となれば、特に女性にとって周辺に“よい男はいない”ことになる。見合い制度が次第にすたれてくると、いささか誇張していえば“もてる男女”、“結婚有資格者”とそれ以外との二極分化が熾烈となろう。

第3の理由は、独身の女性が現在のようないぜん男尊女卑の結婚・家庭のあり方を望ましいものとは思わなくなったことであろう。女性の高学歴化、そして家庭外の就業は彼女等の経済的自立を可能にした。一方、家庭よりも仕事重視の男性の生活態度、結婚したら夫婦で海外旅行にも行けないという拘束性、そして亭主関白、こういったものが女性にとって結婚の魅力を失わせているのだろうか。

正直いって人口学の中で一番遅れているのが結婚の研究である。とかく結婚の問題は興味本位に扱われるが、実証データに乏しい。理論としてたとえばベッカー (G. Becker) の所説は魅力的であるが、首をかしげる点もある。今後もっと適齢期男女の深層心理に迫る調査が行われ、研究の発展が期待される。

(この・しげみ 麗澤大学教授)